

同志社大学新町北別館地点の調査成果について（概要）

はじめに

同志社大学では、学生と大学院学生の諸活動を、よりいっそう積極的に支援するため、現在の大学会館を改築することになり、その一環として、新町キャンパス内にあるボックス棟の改築をおこなうこととし、新町校地遺跡内に所在する新町キャンパス北別館地点の発掘調査を、基礎工事の及ぶ範囲に限っておこなった。

調査期間 2002年2月12日～4月26日

調査面積 1,400 m²

調査機関 同志社大学歴史資料館

調査組織 大学会館新築にともなう発掘調査委員会

委員長 岡市廣成（歴史資料館館長、3月まで）

黒木保博（同館長、4月以降）

委員 横山卓雄（理工学研究所教授）

松藤和人（文学部教授）

井上一捻（文学部助教授）

白水 勝（施設部長）

辰巳和弘（歴史資料館助教授）

鋤柄俊夫（歴史資料館専任講師）

事務局 渡辺孝義（歴史資料館事務長）

水野志津（歴史資料館係長）

浦壁万里子

松本裕世

主担当 鋤柄俊夫

副担当 辰巳和弘

調査参加者 松田度（同志社大学大学院生）、石堂和博・村上雅紀・荻林太郎・杉山俊介・長村祥知・有吉康德・市澤泰峰・佐藤純一・清水邦彦・三坂一徳（同志社大学学生）

赤井圭子・伊藤通子・里見徳太郎・杉尾憲次・竹内穂波・布施晶子

I 新町キャンパス内におけるこれまでの調査

これまで本調査地点の東西で調査をおこなってきた。西に隣接する調査地は新町別館地点で、調査は1974年におこなわれた。現在の地表面から2.5～3m下に、黄灰色の固い礫層があり、その層から掘り込まれた南北朝期の堀が発見されている。堀は規模が幅3m、深さ1.5mで、東西を軸としている。堀の中からは土製の鍋・釜や中国製の陶磁器が出土した。京都市内で発見されるこのような堀は、おおむね戦国時代以後、館や町を囲むものとしてつくられる場合が多いので、この調査区でみつかった堀がどのような役割を果たしていたのか、京都の都市史に問題を投げかける遺構である。現在その一部は新町別館棟の西側に保存され、見ることができる。

東側の調査地は、一つの建物を隔てた育真館地点である。16世紀前半のかわらけ（素焼きの皿）溜まりや、17世紀初めの石組遺構などが検出され、「乾山」銘の陶器や「信光山」銘の信楽焼きの壺などが出土した。

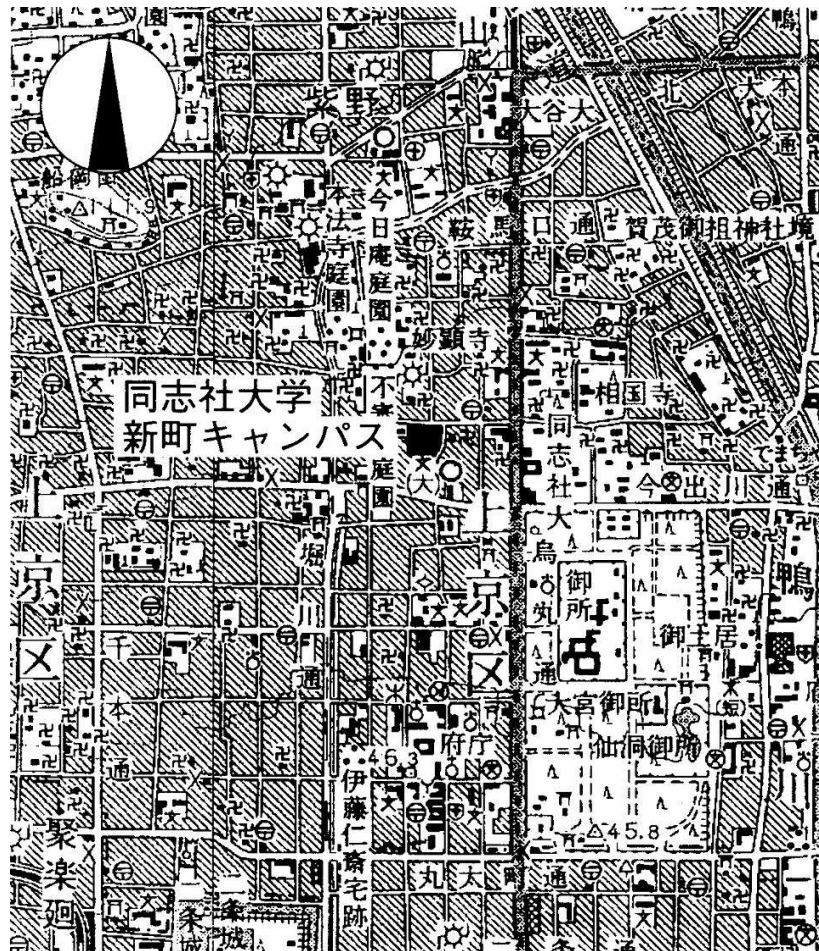


図1 同志社大学新町キャンパス位置図
(S=1/50000)

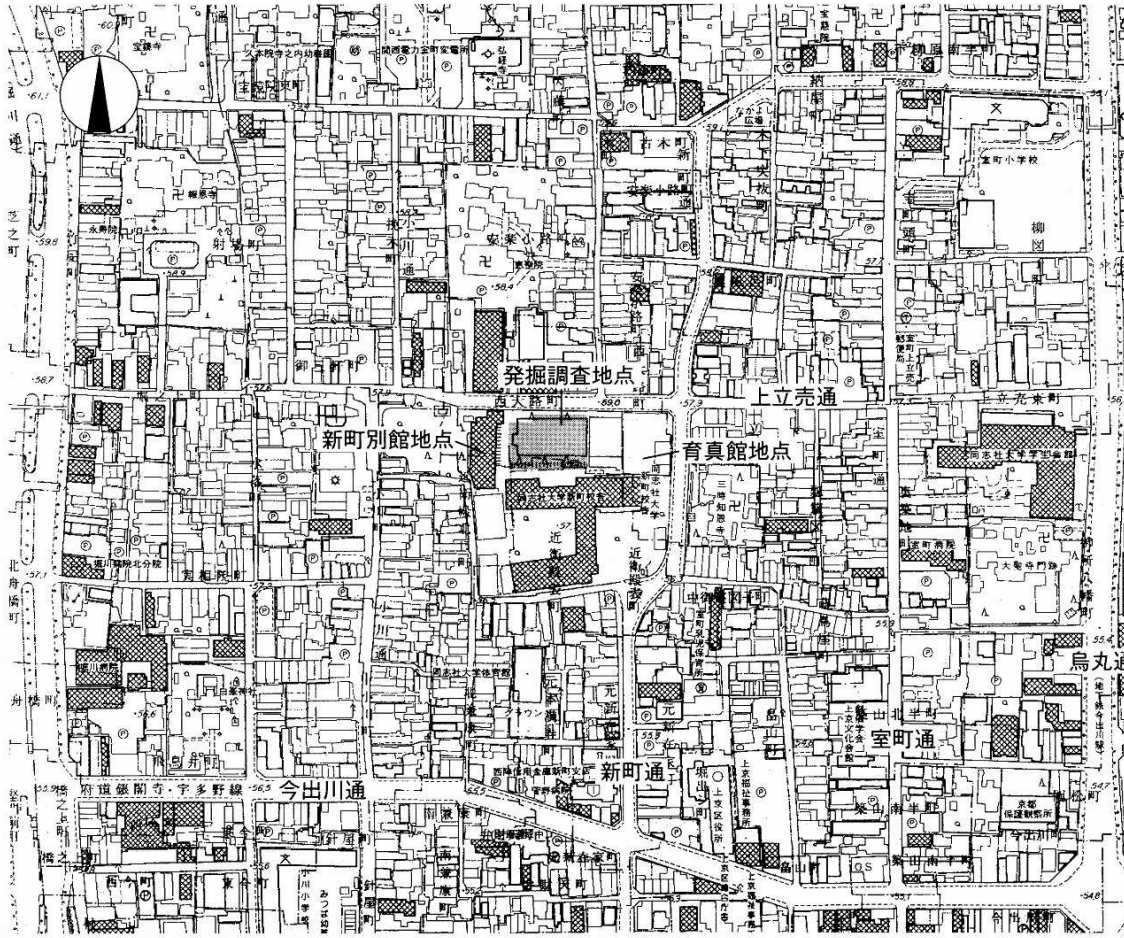


図2 発掘調査地点位置図 (S=1/5000)

図2 発掘調査地点位置図